

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：37402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370676

研究課題名(和文)日本語話者のための朝鮮語学習文法の開発

研究課題名(英文)A compilation of Korean grammar for Japanese speaking students

研究代表者

矢野 謙一 (Yano, kenichi)

熊本学園大学・外国語学部・教授

研究者番号：00271453

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：この学習文法は、日本人学生のため、日本で朝鮮語の基礎を学んだ日本人研究者が、文法書の形式で、日本語話者に必要な文法項目と文法形態を選択し、それらの性質を詳しく説明し、朝鮮語の全体像と構造、運用のための規則を述べたものである。背景には、1945年まで日本人が朝鮮半島で現地の人々と接触し、作り上げ蓄積してきた朝鮮語学、研究者自身が朝鮮語を運用する際にぶつかった問題と解決法、1980年代以降に韓国での外国語としての韓国語教育での成果、1990年代以降の中国での朝鮮語教育の中で蓄積された文法知識を取り入れた。これにより日本で必要な知識を学び、現地での運用を通じ効率よく正確な朝鮮語を身につける。

研究成果の概要(英文)：This newly developed Korean grammar was intended for use of Japanese university students. The grammatical items and forms necessary for Japanese were carefully selected and essential forms were described in detail. This grammar also gives students a holistic image of the structure and important rules of Korean. The academic background to this grammar includes a rich accumulation of experience by the Japanese researcher in contact with native speakers until 1945, skills and training methods developed in South Korea since the 1980s, and research on Korean language from China since the 1970s.

研究分野：人文学

キーワード：朝鮮語 学習文法 韓国語

1. 研究開始当初の背景

大学での外国語教育のために様々な韓国語教材が出版されているが、そのほとんどがいわゆるコミュニケーション能力を高める目的で作られ、文法事項や文法形式の説明は、日本語の形態と対照にとどまり、朝鮮語独自の文法規則や意味はほとんど顧みられない。このため朝鮮語と日本語は言語類型が共通するという学習上の利点がありながら、それ以上伸びず、入門レベルにとどまる学習者がほとんどである。一方、ハングルの読み方と基礎単語 1,500 語を覚え、朝鮮語の全体像と文法形式の説明と結合の規則を学べば、ほぼ独力で解釈が可能となり、また現地に 2~3 ヶ月滞在すれば、長期滞在者並に当該言語を使えるレベルまで到達できる。この問題を解決するために日本語話者のための朝鮮語学習文法の開発を試みることにした。

2. 研究の目的

朝鮮語学習文法の開発の目的は、日本人学生のため、日本の外国語学部で朝鮮語の基礎を学んだ日本人研究者が、文法書の形式で、日本語話者に必要な文法項目と文法形態を選択し、それらの性質を詳しく説明し、朝鮮語の全体像と構造、運用のための規則を述べた文法を開発しようとするものである。本研究では、18 世紀半ばから 1945 年までの日本人が朝鮮半島に居住しながら現地の人々と接触し、その環境のもとで作り上げ蓄積してきた朝鮮語学を参考に、われわれ自身が朝鮮語を運用する際にぶつかった問題とその解決の経験を総合し、1980 年代以降に韓国での外国語としての韓国語教育で生み出された成果と、1990 年代以降の中国で自国民を対象とする朝鮮語教育の中で蓄積された文法知識を取り入れ、学習文法を開発する。この文法の開発により日本で必要な知識を学び、現地での運用を通じ短期間で正確な朝鮮語を効率よく身につけることが可能な学習文法を目指す。

3. 研究の方法

研究は 3 名の研究者による共同研究でおこなう。研究開始直後に基本的な研究方向を決めた後、2~3 ヶ月ごとに研究会を開き、研究代表者が収集した用例をもとに書きためたたたき台を提出し、参加者がそれぞれの観点から検討を加え、意見を述べ、たたき台を修正し、さらに再提出して検討を加え、用例の補完的な収集も行う。学習文法は実用性も考え、規則の説明を最小限におさえて、日本語話者の朝鮮語理解の要となる事項は詳しく解説するという立場をとる。その際、次の点に留意する。説明を基本的なものから高度なものにもって行く。日本人学生が誤りやすい箇所は複数の観点から原因を考える。文法形式に付す対訳は到達点でなく、考える手がかりになる訳語とする。文法形式の一方所だけを読んでも理解できるような形式で書く。

4. 研究成果

(1) 研究は各国の学習文法の概況を把握することから始めた。韓国での文法教育は、「学校文法」で統一されている。外国人のための韓国語教育も多くの場合、この文法に従っている。この文法は、「1. 言語と韓国語、2. 音声と音韻、3. 造語法と品詞、4. 語彙体系、5. 統語論、6. 意味、7. 談話、8. 正書法、9. 古語」が扱われている。日本人の学習には、文字と発音では「2. 音声と音韻」、品詞を理解するには「3. 造語法と品詞」役に立つが、日本人には、漢字語と固有語の区別を必ず付ける必要があり、品詞論のなかで固有語の造語法を扱うことが合理的という結論にいたった。したがって、語彙は語源による区別を重視する必要がある。統語論はそのままでは学習文法の目的に沿わない。ここは日本語と朝鮮語である事柄を表現するのに両語で異なった文型を使う現象をできるだけ取り上げ、解説することが効率的な学習につながると判断し、述部の構成は両

語で最も異なる点であり、これを解説することがこの言語習得の一つの要点とし、「学校文法」の考え方も取り入れることにした。それ以外は必要に応じて取り入れた。

(2) 中国における朝鮮語の文法は、漢族を対象とした朝鮮語教育のための文法と朝鮮族の朝鮮語教育の文法の2つの流れがある。前者は北朝鮮の文法に影響されているものの、孤立語類型に属する中国語の話者に朝鮮語を理解させるため、助詞と用言語尾に訳語だけでなく、詳しい解説を加えている。解説の中には日本語話者にも役立つ記述があり、これらは積極的に採用することにした。後者の文法は、文革前は北朝鮮の影響下にあったが、1980年代の文法は独創性があり、積極的に参照した。ただ、両者とも韓国との国交が結ばれると、一時期、韓国の外国人のための韓国語教育法を受け入れ、独創性が薄まった時期もあるが、2010年代になり再びこの国らしい成果がまとめられている。ただこれらは部分的に活用した。なお、中国の文法書は入手しやすいようで、なかなか手にできず、目にする機会が少なかったが、研究分担者の植田先生の努力により中国における朝鮮語文法の全体像が俯瞰可能となった。

(3) 北朝鮮における文法は、およそ1970年を境に、それ以前の「朝鮮語文法」とそれ以後の「文化語文法」、1990年代以降の「朝鮮語文法」の3つに分けられた。いずれも大学生を対象とした文法や高校生用の学校文法であり、体系として考えるときに参考とし、個々の文法形式の記述では大型辞典の該当項目を記述の参考とした。

(4) 日本人は1945年に朝鮮半島から引き揚げたが、その前に現地で実際の朝鮮語に接し、話し言葉の知識を蓄積していた。これらは教材の形で残り、その「影印本」がソウルの出版社から出され、知識の内容を知るために利用しようとしたが、編集が杜撰で、学術研究の要求に堪えられず、以後、日本国内の

大学、県立図書館などに残る実物を利用することにした。そのなかで、前間恭作の『韓語通』は、これまで単に文法を記述した本と理解していたが、実は朝鮮語をよく理解した者が隔々まで配慮が行き届かせた学習文法書であることがわかり、これに使われたほとんどの技法を採用した。

(5) 学習文法の作成は、「用言語尾」、「助詞」、「品詞」、「文」の順におこなうことにした。用言語尾は、終結語尾、接続語尾、連体形語尾、挟み込み語尾、連用形語尾にわけ、それを単位にたたき台を作成した。終結語尾は階称で形態が分化していることを指摘し、文の種類による分類には限界があることを述べている。さらに話し言葉については辞典の見出し語となっているもの以外は参考とすべき記述はなかったが、通俗的な大衆向けの小説から用例をとるなかでいままで余り取り上げられなかった語尾も見つけた。ただ、これらが方言である可能性もあり、それは韓国にゆき使用状況を実際に調べ記述に反映した。接続語尾は、文と文の関係を主に解明し、それに基づいて個々の形態を記述した。ここで、「未然」「已然」「自分」「他人」といった基準で解釈をあらためた。その結果、意味による分類であるが、形態に反映されているものは整然とした説明となった。連体形語尾、連用形語尾は、文の構成で骨組となるものなく修飾を主たる機能にするもので、ここでは説明を省く。なお、「挟み込み語尾」は補助語幹、先語末語尾をいう。

(5) 助詞は「格助詞」と「補助詞」がある。格助詞は従来体系に従った。ただし造格助詞は指定詞に由来するものを含み、それは区別した。補助詞は話し手の感情や判断を含むもので、日本語と対応を見せるところも多いが、ここでは名詞以外の品詞に付く現象が日本語とことなるので、結合の条件や日本語で補助詞が負担しない機能を朝鮮語の補助詞が持つ場合の説明に力を入れている。また学

習者が補助詞と形式名詞の一部が混同され使うことがあるので、文の性質からこれを説明した。複数語尾は独立せず、助詞であつかった。

(6) 品詞の分類も格助詞と同様に従来の体系に従っている。品詞の各論においては文法の副次的な分野となるが、造語法を比較的詳しく扱っている。これは日本人の朝鮮語学習で固有語が難関となるための配慮である。それぞれの品詞で合成語と派生語にわけ、接頭辞と接尾辞を間単位解説した。形式名詞は名詞に属するが、体言文での様態の表現、補助用言は用言文での様態の表現であつかうのが従来と異なる。用言は語幹からの派生を要点としている。副詞の分類は従来の分類に従わず、日本語の分類を骨子にして、記述を改めている。親族名称と呼称はこの言語で礼儀として重視されている。都市生活者は核家族が多く、大家族の呼称を使う機会が希なため、中部方言に属し、親族名称については保守的な忠清道方言で示した。これは保守的な方が礼儀正しいと受け取られるという判断である。これは直接に現地を調査した。

(7) 文は、日本語と語順が同じであるので詳しい説明は必要ないとの考えもあるが、日本人学習者に分かりやすいという観点から、文の概念、単語結合、文節、述部の構成、独立語の独特な用法、文節の位置、文の種類、間接引用という考え方を採用した。ここには新しい観点から文を記述するのではなく、学習者が文に接し、分析して解釈できる概念をあたえることを主眼とした。

(8) 現在は原稿の複写を分割して、外国語学部で韓国語を専攻する2,3年生と1年間留学を経験した学生に読んでもらい、分かりにくい点や冗長な箇所を指摘してもらい、指摘された箇所を改めている。これは、共同研究の中で文法の説明に使った用語が学生には難解だという意見が出たため、本来、大学の2,3年生を対象として彼らが自習する

ときの参考になることを一つの目的としており、より分かりやすい説明の文法が求められる。また部分的に読んだ学生からの反響ではあるが、「混然としていたことがすっきり理解できた」とか「きれいに整理されている」という声を聞く一方で、「説明を読んでもここが分からない」と更なる説明をもとめられることもある。熊本地震で中断したが、春学期の終わりまでに書き改めた上で、公表したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

植田晃次、中国刊行朝鮮語文法書書目、大阪大学言語文化学 25、大阪大学言語文化学会、pp.95-103、査読あり、2016.3

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

矢野 謙一 (YANO Kenichi)
熊本学園大学・外国語学部・教授

研究者番号：00271453

(2)研究分担者

岸田 文隆 (KISHIDA Fumitaka)

大阪大学・言語文化研究科・教授

研究者番号：30251870

(3)連携研究者

植田晃次 (UEDA Kozi)

大阪大学・言語文化研究科・准教授

研究者番号：90291450